



和朝文鑑

二二三

5  
4709  
2

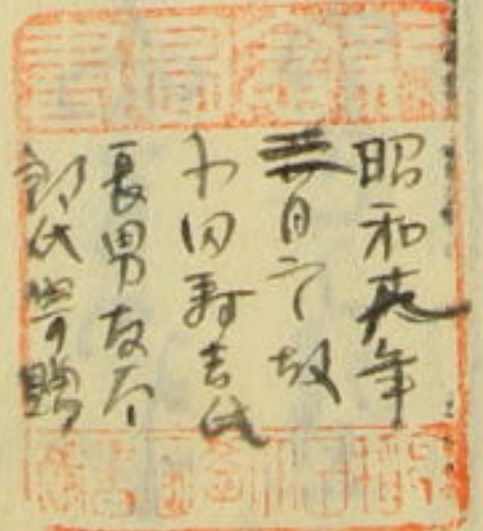


門 へ 5  
4709  
2



賦類

本朝文鑑才二



硯賦

既望賦

涼賦

将暮賦

讀将暮賦

日和山賦

悠哉賦

好色賦

行類

水波行

万歳行

吟類

雨夜吟

曲類

於曲

田舎曲

東曲

舞子曲

大目

賦類

硯賦

北唐李峴

物とありあらずしては石の志とまほしき石の人の心か  
あらしむれは石の命の心をあはれはまほしき石の  
あつらひあつらひの心をあつらひまほしき石の  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ



の中へありては石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ  
まほしき石の心をあつらひまほしき石の心をあつらひ



幸ありはくまありて即ち船の如月を...  
 かく岸上又櫻とちりし...  
 のまると清き月を...  
 むもあつと...  
 月のほのき...  
 今中...  
 らわ...  
 の...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

狂云賦ハ誠ニ瀏亮ニシテ全ク賦体ヲ令セリト云ハ  
鏡山ノ節ヨリ古詩ニ月ノ雲ヲ言セテ此ニ其ノ意  
主振ラユク古詩ニ玉塔ノ喩ヲ借テ千斛仏光ヲ添フ  
カモ故夏古語ノ用ハ此等ノ摘採ニ知レキリ本ヨリ  
先翁ノ文章ハ獅子庵ノ遺稿ニモ數多クアラハ湖東  
ノ文選ニ入り或ハ行下ノ俳文集ニ出テ今ヤ再選スルニ  
及ス聲言百篇ヲ見ズストモ此一篇ノ趣意ヲ見テ此一篇  
ノ虚實ヲ知ラハ和ヲ思ハモ之ニ明カニ俳諧ノ復挫  
白々ニ明ナラン去ルハ其行ノ詞ニスカリテ歡楽ノ中ノ哀情  
ヲ忘レサルハ例ニ樂ニテ淫セストヤ斯云羽ニ於テ斯レ又アラシ  
ニハ

染賦

渡五仲

洛陽のふし川ありて上とあはれ川といふことと  
とるさくらものる川や群の川といふふゆに  
ふれん年この六月七月十八日のおとしは  
の橋のこゝろよりと糸の橋とかふゆては  
かゝる橋とあり一橋きふれの輝きあはれ  
むらさきのむらさきおのゝとらさか  
といふさくらとらさかといふおのゝ  
はらけさくらとらさかにやまの綿織とか

時々のものゝくはらふにむらさき一まゝのくありて  
はらふ西の岸のくはらふにむらさきの枕打とあ  
らふさるくめるとさるくちからむらさきはとあ  
れむらさきをむらさきのさるくちからむらさきの  
むらさきくはらふにむらさきのさるくちからむらさきの  
むらさきの西の岸のくはらふにむらさきのさるくちからむらさきの  
むらさきのねとほらむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
むらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
むらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
むらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの

あゝ神やとさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
餅ありはありさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの  
さるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきのさるくちからむらさきの

見されし一別子金のあはひの事し中より抑ひて  
 いくしをみのみふりききし標しは市の喧しきし  
 久利の向ふらと置さうやよ花の所へふたふた  
 きらやられしれ子のよの事よまかしくおほし  
 あくしむしをさる所のしよのふたふたの事し  
 抑ひてさうさうさうと町くさるしれあはひ  
 狂ふ世跡に縦横無碍ニシテ始ハ王城ノ下代ヲ祝シ中ニハ  
 帝京ノ花美ヲ顯シテ終リニ遊人ノ哀ホラズル誠ニ長安ノ  
 名利ヲ觀シテ然モ長安ノ名利ニ遊リ或ハ四時ノ風景  
 ニ和テノ文法ヲ交ヘタル或ハ家名ノ批訂ニ浮世草紙ノ

筆格ヲ用ケタル或ハ河草金粟物ニ長短ノ對ノ賦体ヲ尺  
 セル總テハ批語ノ筆格ヨリ新古ノ向ヲ合成セリト云ヒ  
 況ヤ儒仏ノ高論ヲ牽ケテ其レカ結語ノ輕急ナル實ニ  
 文章ノ虛實毎ク傳ヘテ洛陽ニ無作者アリト稱スレ但シ  
 世即ハ渡部氏ニ別在ラ抑後園ト云フ馬ヤ人ハ標号  
 東七坊

將其賦

象獸と畜鰐のあはひとまじりてけふふたふた  
 とふたふた張陣の法ありて般盤上入知事とまじ  
 かりし國し王の仁あはひさあはひ忠臣の義あはひ



や勝る所の運上りしと上りしとよのりしと  
多ししとく馬組の法とよのりしと  
厚本片標<sup>ヤシラ</sup>りと金銀標番と八子と  
之南行と軍師の位ありしと  
あり留し孔明ありしと  
下知しとくしとよのりしと  
諸卒ありて敵の城中に入る時と  
ゆき金將の位とありしと  
ありしとよのりしと  
諸將とよのりしと敵陣と

とよのりしとく馬組とよのりしと  
よのりしとく馬組とよのりしと  
居る軍ありしと南の軍ありしと  
よのりしと中央の軍ありしと  
一兵の扱ありしと兵書ありしと  
よくしとく馬組の法ありしと  
のありしとく馬組の法ありしと  
血条ありしと標ありしと  
標ありしとく馬組の法ありしと  
よのりしとく馬組の法ありしと

本朝通鑑三  
若くは味方の大將と討つと馬の足さのまじりあり  
不意の敗軍よりわが有りけりとわが子釣のまじり  
亂のまじりありけりとわが子釣のまじりあり  
はたあれ敵軍も入りて王のまじりとわが子釣の  
つらむ極馬とくれまうつらむ銀とけ柳はら  
金とつらむ極馬の降り責とそれ鉄塚は壁  
もぬとつらむ極馬とつらむと龍王の二は押して  
お軍のおの軍術ありてわが子釣のまじりあり  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ

つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ  
つらむ極馬とつらむ極馬とつらむ極馬とつらむ

ゆよの勝とわよよ角のまの秘伝とて  
よ花とちてよよ花のこよよ花のこよよ  
よ勝よ花のこよよ花のこよよ花のこ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ

角のまの秘伝とてよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ  
よ花のこよよ花のこよよ花のこよよ

よのほのぞき耀ちちりしそのあつたつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

群情のあふ軍田畧あれい波々右裏砂のしらと  
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

敵國とてくもくもくを敵とてしむるは  
 ともかくも紅雲のほろとてかたてしむるは  
 とくもくもくあるはとて軍の高嶺とて  
 一攻もくもくとて敵將をひきよめしむるは  
 沖の富井とてしむるはとてかたてしむるは  
 ありぬ梅とてしむるはとてかたてしむるは  
 とてしむるはとてかたてしむるは  
 諸とてしむるはとてかたてしむるは  
 ようて敵の油とて元親とてしむるは  
 こもくもくありし香車とて角勢のむすむるは

くらりてふとてしむるはとてかたてしむるは  
 まの南月とてしむるはとてかたてしむるは  
 して素<sup>スヤク</sup>とてしむるはとてかたてしむるは  
 とてしむるはとてかたてしむるは  
 とてしむるはとてかたてしむるは  
 いぬ梅とてしむるはとてかたてしむるは  
 両王とてしむるはとてかたてしむるは  
 あれとてしむるはとてかたてしむるは  
 透とてしむるはとてかたてしむるは  
 先進とてしむるはとてかたてしむるは

下はよき月にして諒もよき取合のふねと  
あらて命と我と我と我との時の扱むと  
ふれと言ふもなむこのるにと説く  
諸書より八陣圖とありて神機妙法  
の謀を  
めくし一常挂のやふし将軍と  
将の法とありて早急を油断と敵の  
儒師危きと説くし  
十一月の将軍とありて孔子の  
系載してはとをきりて  
とんてなるものも勝も  
とんてなるものも勝も

此ともろく一これいふ所の  
えと射般四の法とありて  
とんてなるものも勝も

讀将軍賦

村野航

新ふよし一抽の巻物あり  
了龍王の長須く  
海馬の驕り  
ゆり下るる  
はくとも  
あつたひて

剛憶る海えの軍とありし軍師のに勇ふに軍師の  
 詔とくもさうむ神國のありいありしはあひ  
 て上とだりうよ軍の宗とさして中政もあはれ  
 らぬぬのを輔つて若い角りかひきみの心  
 やうて隆建の風流を張良に譲りし一々金持銀持  
 と南羽張を異見もあつて武廻に平力味  
 と金と宗成の憶病におもひ雜兵のよよも  
 ひりりり銀と韓信の勇氣とさうあはれ諸卒の頭  
 の武衛の名といふもさうさうはうて  
 の今もたいめんゆりちあつてやうて  
 体もさうはうて

あつて御馬を張程り解ありて堀と越りて武  
 きうと軍よふに林平に城の名言ふ人  
 地ノ一ちて以逸待勞の兵書よ人の  
 とお葉の戲言よりあつて或る前川の  
 と右軍の二より又幸とさつて或る解と  
 名のわいとあつて人とあつてあつて  
 つかさへてそのさうに世情とあつて  
 ふよあつて師家の八教とあつて  
 吹鳴あつて和漢の情とあつてあつて  
 あつてあつて人をもあつてあつて

こそれとく一（れよとやの人とそとと）をけりも金殿  
 し割腫の人を勝ゆふ心を伺ひせんかうておぼるは  
 服這の族ヤハラらるる負つゝ念作とトはくやけさしお其未  
 る冷言とあくはちぬききと一うきよとけさ  
 うとやとつゝよき之其のけりちり各人號の曉や  
 駒のわくぬの情とやわれ仰よ互よ巻の御とけり  
 とる遠く大般若の真諦とそらねんく近くお持葉  
 の心跡とくむる

任云此の扁ハ前賦ノ註チカラ季女ク故夏古語ヲ解スルニ  
 文ニハ句對アリ意對アリテ體ハ賦體ク尺骨成セリ誦ニ

應用自在ト云し去ルハ新公カ傳類ヨリ言ミ諸ノ一子  
 ラ顯セリ然レハ世ハ扁ノ題ハ殆ニ巻節ノニうラ以テ和漢  
 五般ノ情ヲ喩ヘ儒公ニ思ノ理ヲ漢ニニ或ハ雲起リ凡  
 輕シトハ孟父カ卧毫ノ妹ヲ擣シ杜陵カ胡馬ノ詩ヲ採リ  
 或ハ保元章抄トハ和ニ信賴ノ敗軍ヲ云イ漢ニ孔明ヤ云  
 師ヲ云ル但シ先帝崩御ノ年ヲナラン或ハ蘭州ノ對ニ  
 和漢ニ智勇カノ西エラ云イナトテ異見トカ味トハ互見ノ法  
 ニレテむも巽畧ヲニ罪スルナリ増シテ宗成四韓信トハ  
 金銀ノ情ヲ青尼シテ文章ノ風情ハ云々ニ知レシ或は竟レ  
 ノ一對ニ具シテ教トハ其名ヲ云イテ是ヲ為トハ持其云



元を隠見ノ法ナカラ其是ノ二子ニ云クナリテ世等ノ奇  
絶ト稱スレシ然ルニ結語ノ大般若ハ十將基中將其基ト云フ  
ヨリ摩訶大ノ子ニ歸キラトル世等ハ當意命妙トモ云  
ハ但シ野航ハ四々美申ナルカ別姓ハ村瀬ニシテ濃ノ山縣ニ  
住ス蓮ニ房ト從才ナリ

日向山賦

山岸昨右長

溪ノ北和山ト云ふ名を乃岸ノ向ノ邊トスルノ眼界  
くさくさんとせまらぬ海ノ波おしふるこゝに田川と  
帯ト云ふ五反田と稱ト云フ者其詳も亦切のらる

よめりて白雲ノ里ノ邊ニシテくさくさる邊のなかへ  
ありて海ノちりきり海ノあはれありて林扉と称のなだり  
たり市店ノ白壁と云ふありて南と金風と云ふ角静  
の磐石といひて北と月窟と云ふ入る邊の静と云ふあや  
のそふゆる海谷の觀音も多分の標かじと云ふあや  
松竹ノ以南の竹もさみやりて一吹やと北と云ふく  
西南と云ふくさるる白根のやうにねとおくく新羅  
の月ノ子雲と云ふむと云ふ眼田あやうあや  
いりてあや路ノあやうあやひて野のねおと云ふ  
はめらるるあや子と云ふあやと云ふ野のねおと云ふ

折る波こそくよりきりとよもらしんふと凡雅の人をするも  
 くらあゝふり入すあのためなふあふあふあふあふあふあ  
 ぬまらとちよふるゝ凱唱ケイカウのふらあふあふあふあふあふあ  
 後いけふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 のけふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 目に橋の籠カゴへ上り月とあふあふあふあふあふあふあふあ  
 のよつ吹らす漣シズメのきぬるふあふあふあふあふあふあふあ  
 ねんろあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 橋すのらうう雄ウシ鳴いけいあふあふあふあふあふあふあ  
 い秋田めいれとりのりあふあふあふあふあふあふあふあ

こそすて市念のりし彌々夕陽とくふれく望遠の  
 煙い浪なみの浦も似あふあふあふあふあふあふあふあ  
 これを岸津の遊すとせ胡蝶の香とさる男海うみの  
 笛うううあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 かくらて佐おねう酒とまのりくふあふあふあふあふあ  
 恋過こへ船のうらあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 の情あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 ふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 将ふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ  
 三才岸の池とあふあふあふあふあふあふあふあふあ

水月文庫

廿一

一、  
 のまはたしとくしひま秋のねわとらむむくく天地を  
 人の知よまらむとくしひま秋のねわとらむむくく天地を  
 まよぬわらの脚はくくくくくくくくくくくくくくくく  
 狂云々篇ハ全ク賦体ニシテ文法殊ニ遠キリ始主勃々帝襟  
 ノニ子ヨリ金鳳月窓ノ函寂ナル白根ニ新羅ノ對ハ筆ニ  
 天地ヲ総ト云レシ或ハ山海ノ各物ヲ賦シテ上ニ下ニ下ニ上ニ格  
 ノ自在ニシテ握トリニ奇ヨクハ文法ノ凡俗ナラン或ハ持テ一段  
 ニ胡蝶ニ雷席ハ奇好ニノ依夜姫ニ衣通姫ハ時ヲ得タリト稱  
 スレ然ルニ朝雲暮雨ノ四子ハ宋玉ヲ賦ノ神女ヲ借テ云々

ハ山ノ高ヒルヲ長恨等ノ情ヲ合セタル誠ニ博達自在ト  
 云レシ去ルヲ江ノ波言ノ嘆息ニ寄セテ云々ニ篇ノ由ヨリト  
 成セル本朝文粹ノ序類ニ見合ヌレ總テ世賦ノ趣ハハ凡雅  
 ノ人ヲ待ツト云ヨリ北山移文ノ山靈ニ寄ヒテ北山凡雲景懐  
 ト云ル鐘山ノ黄雲五毛巫山ノ神女モ古ニ文ニ寄リ起結ニテ  
 一篇ノ首尾ヲ見ルレ但シ作者越ノ國住ス山居名中ノ凡士ナリ

悠然賦

蘊子

雪のつりりふゆりてやうく睡りり日世君土庵ふあつ  
 下解のあはふふありまふふふふふふふふふふふふふふふ

何れぞむしうしむ花もありのきりあはしと人とあはれとて  
唯くつゝいづれあはれなるのし流るはらふもあつらんや  
そのまゝに舟のまゝもあはれとてなはれ舟に人のまゝも  
まゝもあつらん流るはらふとあはれらんやわが君はあつ  
とくひもあつらんやあはれはくまもあつらんや  
あはれとてゆき人とあはれとてあはれとてあはれとて  
たまはれとあはれとあはれのしつゝあはれとあはれとあはれ  
もあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
唯くつゝいづれあはれなるのし

和云此賦ハ和歌詔格ニシテ然モ文賦ノ瀏亮ヲ尽セリ其ハ  
悠然たり或ハ王子ノ酒をラ用イ或ハ女子且此ヲ用テ總テ  
其詞ヲ要<sup>カサヌ</sup>ルニ子モ其用ヲ知<sup>サシタ</sup>ス此等ハ漢文ノ尽サレ  
所ニシテ和文ノ風格ヲ知止シ但し世君ノ庵ハ賀ノ金城ニ在  
テ駒王子ノ舟莊ナリむも水竹ノ畫居ニテ然レニ此名ヲ懸シ子  
卜六削ニ休師ノ隱号ナカラ其<sup>コト</sup>ニ在子ヲ讀ムル時ノ門題トシ

和色賦

三無好法師

あはれとてあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと





納のはゆのはちりかゝれて 餘のさなはつくらぢさゝん  
 海とれまはしりもろくぞひ 蟹のたうらふ人とうらふん  
 水とやまゝ水とけあれて はとれとれいれとあらん  
 今もたむと胸のちよこれて おろとふ次いつらぢらん  
 和云此行六十二句ニシテ詩六之韻一協ノ格ナカラ總テウクヌワ  
 一韻ニ六句ノテノまヨリ六句ノム。こまヲ用ユ多シハ一韻ノ格ト  
 ムクテ倭文ニ体ノ鑑ナラシ況ヤ此行ノ例ヲ指シテ和花ノ  
 ニ附鳥ノ古クテ言セ多シ文章ヲ録タル本ヨリ四句ノ名ヲ  
 以テ他心魂ノヲ子ヲ云ルマ然レハ此行ハ水波ノニヨリ達故格故  
 ノ隔アレハ多シ此行ノ各十八セリ誠ニ禅門ノ詔脈アリテ此ヤ

ノ世はつヲ轉却セリト云ヘシ

一万歳行 五七五

華表人

<sup>「同音節」</sup>  
 狂若五万歳々々々 凡そつてはさるるはの  
 ありやの大ねふ。君もほくとはわたり。こゝろよふあ  
 まふまふ。いよあひあてあふひら。せふあふあ  
 たりね。うやんやのうをくせあり。今よもまほ  
 ころ。あふ。うやんやのうをくせあり。今よもまほ  
 ころ。あふ。うやんやのうをくせあり。今よもまほ  
 ころ。あふ。うやんやのうをくせあり。今よもまほ

本朝文鑑





祝し或ハ照ニ照ノ子ハ照鳴ノ倒将ナリ或ハ逢坂ニ響自ハ鶴ノ  
虚言ヲ合セテマヤマノ南ハ臺字ノ縁ナリ或ハ桎鳥ニハ  
西行ノ子ヲ備リ奉袍ニ東坡カ詩ヲ寄セテ例ニ和信ヲ通  
ナリ去レ東坡カ布穀ノ詩ニ勸我服布袴トハ其鳥ノ鳴音  
トハ多ニ奉袍ト云イタルナリ或ハ二京ノ名ヲ云ハル御所  
万歳ノ詞ニ難波曲トハ酒ノ名ナリ然レハ聖俞カ四念四語ニ  
提在虚沾美酒ト啼ク身ハ日本ニ糊持ノ類ナリト啼ナリ  
和音ノ詞ニ寄セテ鳥ノ俗語ヲ變タル多ニ文章ノ虚言ニ  
凡レ或ハ團扇ニ柄トツケ而子鳥ハ囉物ノ扱ナリ涉子鳥  
ノ扱カナリ總テ万歳ノ詞ニハオトツメトノ二用ナリ或ハ京

タイラトハ平安城ノ子ヲ云イテ若桐ハ當時ノ法紋ルラ市ノ  
三重郡ノ早言ニ效イテ多ニモ雲云ルナリ或ハ我朝ノ松ニ鶴トハ  
平ノ子ニ洛陽ヲ祝シ松ノ子ニ武城ヲ祝シテモ千歳ノ  
カケナリ或ハ千平ノ祝ト諸方歳ノ結語ニヤラタラシトハ舞  
收メテ今ハ皇帝ノ御製ニ寄セテ家ノ庭電ヲ祝イタル誠ニ  
同出タキ万歳行ナレ但シ華長人ハ我師ノ隱名ナリ又法奇怪  
ヲ憚テ多ニハ丁寧カ鳥ヲ云ルナリ

吟類

雨如吟

依戸文

ひうたより更なれはれて 雨ふと神とやをねたり。

況もさこそおのけくふふれ ねたてあつたふらふら  
 秋を控へて一を食ふねと 世とも確のまゝふらふら  
 衣帯ぬらふにありふらふらと 人ともわらふらふらと  
 けいけいのおれはけいけいけい 鹿かぶらふらふらと  
 伊勢のおれはけいけいけい 忘れらるらふらふらと  
 まらまら西のおれはけいけい 漏りて秋のともあふらふら  
 けいけいおれはけいけいけい 暮らぬらふらふらと  
 けいけいおれはけいけいけい けいけいおれはけいけい  
 けいけいおれはけいけいけい 桶もきらふらふらと  
 秋を秋とて推一の宮に ねたてあつたふらふらと

秋を控へて一を食ふねと 世とも確のまゝふらふら  
 衣帯ぬらふにありふらふらと 人ともわらふらふらと  
 けいけいのおれはけいけいけい 鹿かぶらふらふらと  
 伊勢のおれはけいけいけい 忘れらるらふらふらと  
 まらまら西のおれはけいけい 漏りて秋のともあふらふら  
 けいけいおれはけいけいけい 暮らぬらふらふらと  
 けいけいおれはけいけいけい けいけいおれはけいけい  
 けいけいおれはけいけいけい 桶もきらふらふらと  
 秋を秋とて推一の宮に ねたてあつたふらふらと

破屋ノ奇ヨリ衣食住ノ之中ニ住居ニ四才ノ艱難ヲ云リ  
 然レハ春秋ノ三子ヲ以テ夏次ノ二名ヲ互照センモ四才ニ三才

ヲ分ケテ春秋ノ詞ヲ撰ツル等ハ傳句ノ意對ニシテ言ハレハ篇ノ奇  
 法ヲ存スヘシ但シ草屋ニ寄ラ讀ム古人ノ證考ヲ尋フニ誠ニ  
 吟ノ一休ハ聲ノ聲ニ喩テ自己ノ沉思ヲ云ハル杜陵ハ我子ノ寢  
 嚮ニキテ歎キ草屋ハ我子ノ行末ヲ思ハル守ノ起即ノ母ヲ  
 喩ナルシ然レニ破ノ月ヲ以テ周ノ一子ヲ云ハレハ結語ハ題名  
 ノ後字ナラフ沉吟ノ情ヲ盡シテ寫實ノニ子ノ無用ヲ如ク  
 ニ但シ作者ハ沈野中ニシテ美濃ノ園ニ遊散ス蕉山ノ古瓦

曲類

歌曲

二章

作者不知

一やとみおらららのいれりこころをいへり

るる月を

おのゝやらのあそびのゆゑ——あやうな端の  
 ころのあ

狂云世ニ草草ハ古キ唱キヤカノ名曲ノ又鑑ニ出セルヤキハ  
 正則ニ草ハ古今洋ホノ實アリキ月ヲヨクハ文ニ草ノ花ナク後ニ草ハ  
 新古今ノ世能ニシテト深ニ牧歌カ詩情アリキ床敷ト思ヒヤリ  
 又ハ世ニ草草ノ実言所ニシテ草草居ル鶏ノ音怪覺ナラシカ

田舎曲

作者不知

一市を歩く〜〜〜人あつた〜〜〜の歸りまゝ〜〜〜あつた

ふふふのやとふふふふ  
ふふふのやとふふふふ  
ふふふのやとふふふふ

和云此三章ハ能登ノ國曲ニテ總テ之越路ノ向ニ詠詠ス深ニ  
下里已人ノ類ナラシ然レハ樂府ノ古風ニ似テ今昔并ハ情  
ヲ添ヘ奏禪ニ思ヒ直レハナト俚語ノ中ノ風雅ニテ所見ニテアリ  
トモ云ヘキナリ然レハ都曲ニ由レテ法ニシテ田舎曲ハ頭挫ノ  
格ナラシキヤカシ五七言ト成等ニ七五ノ拍子ヲ知レシ

東曲

と仰

かふやふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

和云此曲ハ奥ノ田舎ニシテハトハ配得ラユク千ハカトハ不守ラユク總テ  
ハ豈路<sup>タヒ</sup>はノ榮耀ハ免モアルニ儀ノ年貢カ氣毒トナリ但シ生ハ  
東國ノ産頭ニテハ親ノ樂府ヲ詠ヘト徒然<sup>ツク</sup>ク為辨抄ニ載スアリ

舞子曲

と仰

ふふふのねのねのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふのねのねのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふのねのねのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ



孝美長し世ヲ為稿ニ過キヨトナリ或ハ流モ因スヤトハ一ハ中ノ  
 短語ニシテ君見スマ君向スヤノ例ニ古樂府ノ常語ナリ然ルニ  
 我子ヲタキテハ猿抱子<sup>猿</sup>帰ル<sup>ル</sup>青嶂後<sup>後</sup>ト云ル古詩ノ意ヲ  
 南スヤト舞子ノマドナキヲ諫メシナリ但シ世ヲ忍ム以下ハ五ニ  
 抑子ノ向ラ拔キテ例ニ五又古ノ曲ト見ルシ況ヤ柳子ノ西木栢ヲ  
 對シテ佳者ノ名ニ居ラシヨリ疎<sup>疎</sup>菜ノ安キニ暉<sup>暉</sup>ラシト先賢  
 ノ詞ヲ取セテ朝ニ暮四ノ世ノ様ラ云ル世等ハ和者ノ文ニ  
 ラ傳ヘテ世ノ采ヲ落ニ教誡ヲ忘レカレ誠ニ天地ノ情ヲ動シ誠ニ  
 鬼神ヲ毛<sup>毛</sup>泣<sup>泣</sup>レムシ

本邦文鑑第一

引類

富士引 手羽引

謠類

雨乞謠 石搗謠

辭類

風俗辭 山姥辭 艶詞 戲佈辭

憐捨子辭 夕暮辭 鳥追辭

歳類

雨居歳 猫恋歳

大月十六日

引類

富士引

并寄

山部赤人

あぢきらのまろけ けし神さひてさくくわに駿河あ  
けのさねとあぢのふあけさけさねさくくわに此歌も  
かくらひてる月のまもるもあぢもあぢもあぢも  
けしけさねをゆりさくくわにさくくわにさくくわに  
さくくわのさくくわ

臣子れ浦よりさくくわにさくくわに

けしけさねさくくわにさくくわに

ね云引ハ諸物ニ分明ナラス去下詩騷ニ似タル物ヲ序引ト

系(テ註シタル引ハ決シテ詩系ヲ後ニスト云ハ題註ノ字々ノ  
意ナランバ故ニ詩人玉屑ニモ姑ホラ載ルヲ引ト云テ彼ハ詩引  
ト系ハ註セリ然レハ万葉ノ題各モ山部赤人等ニ合シ  
歌一有 系 短系トアル時ハ五則ヲ体トシ後ヲ用トセリ去レ  
長短ノ遠ヒアリトテ同シキヲ二角ツラ子テ系 歌トハ如何  
強テハ長短ノ系ニ角トハ云ハシマシハ長系ヲ引ト云テ短系  
ヲ後ニサレル時ハ誠ニ本朝ニモ引類アリテ是ヲ古今ノ文鑑  
トナサハ選者ニ一部ノ眼力アリト稱スレ況ヤ結文ノ詞ラんレ  
云クワキ行ハ富士ノ山ト次ノ短系ニ云クワケタル不思議ニ序  
ノ両格ヲ二系テ和漢冥合ノ引ト云ハシ

子母引

并かなり

よむ指

父を名し一あふ暱草の子よ入るとまくれ風雅を  
 おのこあふし。その子母をたぐひの指をいふもその親  
 あくちりてその子もはなぬ能はるし。一家の海内  
 よめらるし。その方の名をいふに海内といふもあふし  
 ちりちりといふわらふし。けしに北の南の名をあへて  
 といふのあひらけやあふし。そのあひらけいふ  
 傍りていふもあふし。あふしといふもあひらけ

ね云北引の名、説す。その路ニ長短ノ拍子アリハ杜ノ枕竹杖

引も似たり。是も傳文ニ引ノ体トミウレシ然レハ草ノ子ヲ  
 以テ始ハ其父ノ遺遺名ヲ称シ中比ハ其子ノ教訓ヲ加ヘ終ニハ  
 祝詞ヲ用イタル誠ニ序詞ノ短小間ニノ一篇痛瘳ラズセリト云  
 へレ増シテ花鳥ニ詔ヲ寄セテ引ハ文法ノ凡流ヨリ重部  
 ラモテナスニ虚實アリ或ハ其句ニ傍トハ南ニハ藤袴ノ縁  
 アリテ其子ノ行儀ヲ云ルナラン但レ比南ハ本以氏ノ子ニシテ  
 其比ハサキナリトウ越ノ高田ニ産ス暱草ハメノ例名ナリ

愚類

雨乞謡

般珪和尚

うらささやうささやうささやうささやうささやうささやう

大田下

三



いわれらるる一り一り一り一り一り一り一り一り一り一り  
仁云北謠ハ播下ノ人ノ昔ク各傳ヘテ兩乞躍ノ唱音ナリ  
去ルハ其世ノ國臣ニテ北和高ノ通性ラ慕ヒテ兩乞ノ音特  
ラ體ヒスラシ心外無法ノ禪語ラモホサス此等ノ偈語ラ  
童蒙ニ教ヘ給ル誠ニ狂言綺語ナカラモ仏業ノ縁ラ  
結フクハ天モトヤ納受ナラン其ハ一本來ノ面目ニシテ  
其ハ例ノ不生ナリト其家ノ人ハ按排スヘケレト實々躍  
ノ姿ニ敵<sup>シテ</sup>仰テ遊戯自在ノ法ト見テ深ク信シ高ク仰  
クシ但シ始ハ播ノ龍乃ニ住シ後ハ天下ニ播行シテ  
佛法東漸ノ禪師トハ云ヘリ

石搗謠

并序

あきねま

ひい依義神曲辰の辰時よあさりあかふかた  
とくねらばはらそものやあきねまをそそ<sup>あきねま</sup>  
うて大工の作を束の鐘一丁とて増しちりやめら  
唐楽の辰時よあさりとほむむとそそ<sup>あきねま</sup>のやうらに  
ふとくもよ水注の誅よときく<sup>あきねま</sup>りら<sup>あきねま</sup>殿周奉  
のせくとんり人のんそあやうに袖るや<sup>あきねま</sup>感陽宮た美  
とほつら<sup>あきねま</sup>らね<sup>あきねま</sup>し<sup>あきねま</sup>願<sup>あきねま</sup>さ<sup>あきねま</sup>の<sup>あきねま</sup>す<sup>あきねま</sup>る<sup>あきねま</sup>は<sup>あきねま</sup>ち<sup>あきねま</sup>そ<sup>あきねま</sup>そ<sup>あきねま</sup>そ<sup>あきねま</sup>そ<sup>あきねま</sup>  
そ<sup>あきねま</sup>お<sup>あきねま</sup>の<sup>あきねま</sup>ほ<sup>あきねま</sup>と<sup>あきねま</sup>あ<sup>あきねま</sup>き<sup>あきねま</sup>し<sup>あきねま</sup>り<sup>あきねま</sup>せ<sup>あきねま</sup>ら<sup>あきねま</sup>よ<sup>あきねま</sup>大<sup>あきねま</sup>さ<sup>あきねま</sup>う<sup>あきねま</sup>れ<sup>あきねま</sup>は<sup>あきねま</sup>あ<sup>あきねま</sup>き<sup>あきねま</sup>り<sup>あきねま</sup>て

世に於て人の心は...  
あつたもののた...  
字のおまゝ...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

まもぬれ...  
...  
...  
...

ね云此謡ハ一章七句ニテ或ハ古来府ノ体トモ云ハ  
其序ハ虚誑ナラウ而世ノ妻相ラユクヤセシ文雅ニシテ且ツ  
可笑シ况ヤ其謡モ俚語ナラウ花ノ子ニ風雅ヲ添ハタシ  
此等ヲ和謡ノ文鑑ト見ルニ但シ此等曲ノ類ハ如ク金城ニ兩  
度ノ面祿アリテ枚重北枝カ風雅ヲ残セシ其句ハ其世ニ  
吟行ロリトツ或ハ題下ノ坊主仁平ハ削ニ其師ノ名ナリ

辭類

風俗辭 并序

渡部

そのまゝ...  
はるい...  
...

の音律とまはりかへしうこれおもふといふ言のき  
 した通ともしほ文の辨類ふ武帝の秋風と如し  
 ついて六朝一叶のあつといふ中よ詩ありて騷あり  
 騷ありて辨とみれ騷のきなりとらうとて言の辨のき  
 いらくわはして辨のきありと物と一きい  
 とて言の辨とらうとて言のきありと物と一きい  
 言してとらう一格ありとて言のきありと物と一きい  
 ありとて言のきありとて言のきありと物と一きい  
 仲るれとらう一漢の帝れ秋風と如ありと物と一きい  
 ありとて言のきありとて言のきありと物と一きい

しおしといふおの船人といふと詳ほのあつては是辨の  
 辨の子とあつてとらうと一はとや言のきありと物と一きい  
 なくか訓解あれと辨類とらうとて言のきありと物と一きい  
 つれと字訓のちとらうと一はとや言のきありと物と一きい  
 此言の詞ありとて言のきありとて言のきありと物と一きい  
 実言向のわたりとて言のきありとて言のきありと物と一きい  
 語類とて言のきありとて言のきありと物と一きい  
 とつとて言のきありとて言のきありと物と一きい  
 のるにといふて言のきありとて言のきありと物と一きい  
 ろく上流と記す伊呂物説の詞はといふて言のきありと物と一きい

の説は、  
 ありあつたまゝいふまゝに、  
 の解とあつたまゝに、  
 文を、  
 師師の、  
 も、  
 一、  
 の、  
 の、

傾城詞

一、  
 一、  
 一、  
 一、

馬士詞

一、  
 一、  
 一、  
 一、

和云此一篇ハ辞類ノ註解トリルニシ然レニ楚辞ト云付ハ  
 楚國ノ人詔音ラズル壁真ハ國東ニハイト云イコトト  
 云イ都ニハサシセ氏アンス氏耶詔ハ國々ノ風俗ナリ去レハ序  
 モリ辭モ句讀ノ長短ヲ調ヘルハ詩賦ノ行ニナラス  
 此七韻ノ外ニハ格ヲモ立テ書ク文類ヲ編ラカレナリ  
 去レハ頌城ノ詞ニハワシモヨシモ彼カ平詔ナカラ快ニルト云イカレ  
 厚ニカルト云レハ例ニ風雅ノ意ニナルナリ次ニ馬王ノ詞ハ錢案  
 各ヲ彼カ風俗ニシテ又ラ佳ト云イニナラ爾ト云レハ行ノ  
 一字ハ例ノ風雅ナリ或ハホツシモ通ク又トハナラシナラ又ト  
 云フ者ヲホツトワメスハ耶詔ニ此ニテモ遠隔モ云ニ知レ  
 知レ

山姥辭

一休和尚

世も〜山姥をよとあしを〜とをわらひあ〜き〜とわらぬと  
 き〜り〜と〜り〜と〜ぬらぬの奥にあり〜き〜ぬらぬ人向ふありと  
 一〜て〜る〜と〜つ〜つ〜や〜れ〜る〜と〜か〜く〜ら〜ふ〜自〜れ〜と〜ま〜地〜し  
 一念化レの思ふとあり〜て〜目〜ぶ〜ま〜ま〜れ〜し〜邪〜心〜一〜如  
 と〜ん〜ら〜時〜を〜色〜即〜是〜空〜と〜の〜や〜し〜に〜佛〜に〜あ〜れ〜ん〜世〜法  
 あり煩悩あは〜ま〜言〜提〜あり佛〜あ〜れ〜ん〜云〜々〜あり衣〜と  
 あれ〜ん〜山〜姥〜あり佛〜あ〜れ〜ん〜云〜々〜あり衣〜と  
 何〜人〜向〜ふ〜あ〜れ〜ん〜云〜々〜あり佛〜あ〜れ〜ん〜云〜々〜あり衣〜と

本朝文鑑三

十



艶詞

集部

姫云例のふちさしとくしほり探はるる  
 かしらさかきさかきさかきさかきさかき  
 こほれさかきさかきさかきさかきさかき  
 くちさかきさかきさかきさかきさかき  
 さかきさかきさかきさかきさかきさかき  
 かしらさかきさかきさかきさかきさかき  
 人のさかきさかきさかきさかきさかき  
 さかきさかきさかきさかきさかきさかき

おうりさかきさかきさかきさかきさかき  
 とくさかきさかきさかきさかきさかき  
 くちさかきさかきさかきさかきさかき  
 かしらさかきさかきさかきさかきさかき  
 さかきさかきさかきさかきさかきさかき  
 ありさかきさかきさかきさかきさかき  
 狂云北段八段中紅葉如くノ詞ナラまニ北題ラ加ル  
 ハ之際隆房ノ艶詞ニ子ヲ借リ去ハ隆房物語ヲ  
 我歌ノ文章ノ鑑トナレハ筆ニ縦横ノ神アリテ人情  
 ラ尺ノニ委曲ナラスト云古又ナレ増シテ北段八段上ノ隆房ニ  
 思ハ給ヘル六十帖ノ中ノ骨節ナラシ然レハ幼キ人ニ對シ





狂云此篇ハ光廣卿ノ有馬ニ入湯付ノ筆下トテ  
 行次ニ書傳テテ見角ノ語モ直ルキカ然レニ此篇ノ題名  
 結文ニ綺詔ノ二字ラ見テ此ノ子ヲ以テ題セシカ中間  
 ノ一頁ヲ辭ト見レハ古文ノ漁父辭ニ似テ之前後ニ  
 序詞ノ文勢アレハ此等ハ漢家ノ辭ト云ハシ但シ此篇ハ  
 和奇ノ家ナカラ此等ノ字格モ遊ヒ玉ル誠ニ文法ノ  
 疎カヨリ虚實ノ自在トハ稱スレ

情捨子辭

芭蕉庵

豎波の園より川みぢりりよの山くろりある捨子此

あられまゝにありいよやけ川のこの岸よあきてはなせ  
 の所とまのあふささしもあはけくらの命かみり  
 まゝとまゝとまゝにわさけうの秋風にとや  
 らんあをやとあれんと袂より涙あふる  
 後とす人捨よと秋の風わらふ  
 心うきやけをうきまわらるる母と母と  
 さうら又を海とまじりあはれ母と海とまじり  
 あらと所とれまうして海つねのほくまこと  
 狂云此辭モ漁父ノ文勢カナカラ捨子ニ秋ノ風イロニト  
 向カケテ如何ニヤト序詞ニツケタレ但シ辭類ノ一休

倭文ニ辞ヲ立ル時ハ千般ノ法格凡レシ誠ヤ富士川ノ瀬ヲ  
浮世ノ波ニニイカケタル北川チラテハ更ニ知ルニシテ小ニ種ヤ露  
ハ深クノ奇ヲ借リ父母ノ情愛ハ在子カ天性ヲ云凡例ニ  
和漢ノ博達ニシテ是ヲモ漢家ノ辞ヨリ倭文ノ助詔ヲ用得タリ  
ト云ヘシ

夕暮ノ辞 子后

東花坊

ひーああり湖東の人と逢ふとて武江ノ世本行の  
ふとあーちと東い指入人ありてけ別とあふ  
あふちや海よなぬ人たり人ノ心ナクもなぬを所  
ありはねとてむいーあふ漢士ト云ふ

丁詞とありて逢ふ人と逢ふ然とて逢ふ人と逢ふ  
此のそふとて逢ふ人と逢ふやけりて逢ふ人の  
ふあふと然とあふ人のあふたふと逢ふあふむし  
いり逢ふあふ人の一針の備とてやけりて逢ふ人の  
妻子とあふりて逢ふ人の逢ふ各と逢ふ逢ふ  
あつて逢ふ逢ふあふと逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ  
の逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ  
け逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ  
あふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ  
逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ  
逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ  
逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ

おちやけのよにあつらへ武陵二百里の旅よあやむきり  
そは言られぬうらむいづくしふさくにわしちの  
あきと人くけしけのあつらへと秋よさあむの月と  
よ二百里のおねぬ人のあつらへとさあつらぬのあつらへ  
わして越路の角とさあつらぬ人あつらぬのあつらへ  
い人をあつらへ梅のまよとわなふ花あつらぬ人あつらぬ  
よさよ支梅の説のよと梅のよのあつらへとさあつらぬ  
も梅のよ南よとさあつらぬあつらぬを酸の味とさあつらぬ  
馬祖を倒めさあつらぬとさあつらぬとさあつらぬとさあつらぬ  
よして四年詠ふとさあつらぬとさあつらぬと梅の園よとさあつらぬ

あけこきりけつとさあつらぬとさあつらぬ

あつらぬとさあつらぬとさあつらぬとさあつらぬ  
あつらぬとさあつらぬとさあつらぬとさあつらぬ  
あつらぬとさあつらぬとさあつらぬとさあつらぬ  
あつらぬとさあつらぬとさあつらぬとさあつらぬ

狂云此辭八十二句アリテ鶴立八句ハ発語ト八十二句ニシテ  
三韻ナルキニ是ハ二句合セテ一句ノ意ナレ故ニ六句ニシテ三韻  
ナリ是ヲモ叶辭ノ一格トスルハ去レハ其ノ序ハ老子ノ詞ヨリ  
中比ハ毛詩ノニ秋ヲ摘シテ和ニ仲磨カニナラ寄セ漢ニハ  
王維カ詩ヲ合ス梅子ハ傳灯ノ故古ニシテ師才ノ中ノ稱名  
ニヤ總テハ西行ノ東下リニアラテ定之永新ノ心屋ノ伴

此ナラズル本ヨリニタノ暮ノ詞ヲ含メテ僧俗ノ言富ラ旅ニ  
 ニ題ハセル誠ニ文章ノ奇法ト稱スレ然レハ此等ノ辭ニ以テ  
 漢文式ヲ守リテ別ニ倭文ノ体ヲ立タル法ニ私ナキ語ニ  
 ナラン但レハ序ニ湖東ノ下ハ五老井ノ許ニシテ其時ニ多ク  
 辭ト題シテ彼カ文選ノ卷頭ニ置キ又去レト辭ト題センハ別ニ  
 筆格モアランカト此辭辭ヲ論スレハ多ク此篇ヲ出セルナリ

鳥遊辭

作者不知

やんらそくばやふ所や一戸所のも遊うまうりて物の神  
 といりのちも殿もはくしの村もはくしの大は門もはくし

法廳向の所内入るるさうい所やらた大將入る大將向  
 殿下るるあひそさぬのさう遊はくあふのよふさるや  
 此へ西向のよふ所を南のよふ所ありて八の所はあり  
 中の牧のよふ所と常年此の所の市代もく行やれは  
 打くる田をたれくあつらふはくはくまといふはくは  
 初る子もらふ所のまよとよまらうりてこのか所のまよと  
 一万束のりりし麻もあつて馬ははくやあはくはて雄ねし  
 志はくし雄ねしはくしはくしはくしはくしはくしはくしはくし  
 ころあはくしはくしはくしはくしはくしはくしはくしはくし  
 野のまよはくしはくしはくしはくしはくしはくしはくしはくし

痛ろふくはふてきもれ田の林あふさきつゝ  
 帯よりいのかねもよみかのかんりやよあんとはうて  
 先より西にたるとはうすも遠とらふて一年うら  
 かにてまれば、<sup>トツキ</sup>十月<sup>ツギ</sup>所をの月とて月といふ  
 て二月の月とて節月と祝ふ中界、<sup>あつとちお女節</sup>  
 さらばらちくやじち仰たのらうとそふのいひめ

任云此章ハ正月ノ祝詞ニシテ鳥追ト云者ノ曲農民間々  
 シ云イテク唱寄ナリ其者ハ音シ詠経者ト云テ逢坂  
 禪凡ノ流ラ及テニ并ノ近松俊ラ本寺トセリト今依多羅  
 ト云者ナラン然レニ此篇ノ分明ナラス早凡ノ者ノ習ヒ傳ヘテ

鳥馬ノ詔ニアラテセシ武蔵坊弁慶ラシボシ  
 ト句讀セル如ク口授ノ違イ多ク去ヒト此寺ノ文ニ早  
 シ思九向シテ定ムキニモ味スホニ其文ヲ中田各レテ  
 法格ノ外ノ風雅ヲ知トナリ去ルハ五七ノ詔路モナリ假名真  
 ノ配モナク二句長短ノ和子モナキニ純ニ風雅ノ情ヲ見テ  
 此等ヲ辭ノ文鑑トセハ又五早ノ定水ノ活計ナシナリ去ル  
 此式ノ林手庭ニモアルニヤ一聽内所ノ沙汰ニ及ビ中牧ハ井田  
 ノ法ラ云ル但レハ迎喜宮上ノ淳朴ニシテ上古ノ作文トハ  
 見エタリ然ルヲ結詔ノ姓婦ヨリ不意ニ仰法ノニ子ラ云ル  
 姓婦ハ内ノ祝詞ノ仰法ハ彼カ常詔ナリト見ルレ

歳類

雨居歳

芭蕉庵

あつたさなればあやなれば人のまひまあはらうらく  
人よちみハ一人さあはらうとあはらういふはらうあ  
とわし月のあやあはらうのいふあはらうあはらうあ  
ころふーやあやあはらうあはらうあはらうあはらうあ  
かろ庵のまはらうあはらうあはらうあはらうあはらう  
てまはらうあはらうあはらうあはらうあはらうあはらう  
あはらうあはらうあはらうあはらうあはらうあはらう

任云此題ハ大守ノ辞ヲ借テ向ハ雨チハ人ノ独知ナリ

ト朱氏ヲ註モ云ヘリトクまはらうあはらうあはらうあはらう  
或時ハ世ヲ疎トシ或ハ人ヲ懐シム本ヨリ心神不定ナリ  
ハ頓阿モ以月ノ情ニ過タリトニ兼好法師ノ歳文ル仲  
誠ニ此等ハ前後ニあはらう字ヲ用イテ自己ノ散乱ラ歳  
首尾ノ文法ラ見ルキナリ但し此句ハ切字ノ発句トモ云フ  
キヤト故之羽モ語リ玉リトフ常ニ我師ハけ古ヌラ云ヘリ

猫恋歳

ち巴静

猫しくいふら女この言は懐きさあはらうあはらうあはらう  
らあはらうあはらうあはらうあはらうあはらうあはらうあはらう

屏風の勝手もあらむむじり果てふ所掃とるいゆみ  
 糸の糸をねらむちちらちちら月おのほらふは  
 ささしほいそ人司とほいこわん今もこら  
 うねおむむ果て野等掃のこもさら  
 ほうと今あるの程ね掃もあつるあつる毒は掃  
 の色よあつ掃むのふのあつあつとらられぬ  
 ささひささしとささひささしとささしとある  
 ほうささすねあつるこの方入ぬのりて用掃程は  
 人を果あつとささしとささしと掃もあつて甲向の  
 鏡のささしとささしとささしとささしとささしと

川流とるささしとらねして有懐の色もあつて掃  
 一ねとささしとささしと人々二世をささしと  
 ころんとささしと掃もささしとほんと掃もささしと  
 あらにけり掃とあつとんとも掃もささしと  
 ささしとささしとささしとささしとささしと  
 あつとん  
 ねと北條は自利利他ニシテ詞ラ言ふ三流雅ナリ也  
 ハ源氏ノ風流ヨリ枕草紙ノ寓言ヲ合ヒ或ハ徒然草ノ  
 古語ヲ借テ掃むノ心ノ古ナクヲ採ル孤ト掃トニ又ハ  
 フ云テ又ト云字ノ徒名ヲ重ナリ又筆ノ自在ハ  
 此向ニ見ルベシ然ルヲ孔子ノ語ヨリ人ノ色欲ノ掃ヨリ

毛浅向敷ハ遠ク箴テ近ク慎サテヤ然リ色ニ遊ヘクテ  
 色ニ漂フカラストハ固雖ノ意モ此支ナレ但シ巴静ハ冬田  
 氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス素生ハ濃ノ竹ノ鼻ノ厓ナリ  
 トワ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

相州川入  
 五雲井  
 松堂藏書





